

武市 真寿美さん(NPO法人高知市子ども劇場)

私たちは、今年度「感じあう、認めあう、知りあう」をテーマに活動してきました。子どもたちのコミュニケーション力の低下は、近年あちこちで憂える声があがってきています。

昔は道ばたで群れていた子どもたちが、今は仲間といってもテレビやゲームなど1つの画面に向かってみんなが黙って遊んでいる。このような中で、どうやってコミュニケーション力を得られるだろうかと考えた大人たちが子ども劇場を通じて、コミュニケーション力アップ実行委員会を創りました。そして、「感じてみよう！ 伝えてみよう！」、「お話をつくろう！」、「自然と話そう」、「絵本で劇あそび」、「音と体でコミュニケーション」の全5回の取り組みを実施しました。

最初は、バラバラな感じであった子どもたちが、プログラムが進むにつれて一体となっていく、自然と協力しあって、自分の思いを安心して表現できる場になっていったと思います。コミュニケーション力の低下は、子どもたちだけの問題ではなく、大人たちの問題でもあります。

私たちのようなNPOと家庭や学校、自治体とが連携し、主体的に実践の場づくりをすることで、「伝えあう力」の大切さを感じ育てようという大人のネットワークが広がり、より豊かで温かい心のあり方を子どもたちに伝えていけるのではないかと思います。



廣末 容久さん(旭小学校区青少年育成協議会)

昨年度まで3年間、さわやか福祉財団の「さわやかこそも広場」に参加して「旭ダッドの会」を設立して、たくさん子どもたち、保護者、地域みなさんと交流してきました。

「蛍まつり」、「あさひ夏祭り」、「環境ボランティア」、「工石山キャンプ」、「昔遊び」、「バルーンアート」「卓球教室」などなど。実施にあたっては、旭青少協役員会を中心に企画を実施してきました。参加者は30名から40名程。祭りなどは200名から300名位が参加してくれました。参加してくれた子どもたちが、指導者の手伝いをしてくれるようになりました。おとなしかった子どもが、学校・地域で出会ったときには積極的に声をかけてくれるようになりました。子ども110番の家である「アンパンマンの家」を訪ねて歩き、子どもたちはその家の方と親しくなることができました。大人も遊びを通して今の子どもの様子を見ることができました。子どもたちは身近にある物から、作ったり、遊んだりすることも覚えたと思います。今後の課題は、もっと大人に参加して欲しいということと地域の団体との連携を図っていきたいということです。

○活動を通して気づいたこと、感じたこと

・大谷さん

「子どもから学ぶことが多い。異年齢による遊びはプラスが大きい。大人同士の横のつながりもできてきた。これまでは、親の基準でさせることが多かったがそれは大人の独りよがり。子どもの世界に入ったら、子どもに関わらないことが大切だ」

・関田さん

「家庭の環境が、子どもに表われる。我が子をどう育てたらよいか分からない親がいる。自分の子どもではなく、いろんな子どもと関わることで子育てのヒントをもらい、自分の子どもも自立していく。大人育てが大事だ」

・武市さん

「みんなが知り合いになるための仕掛け、特に子どもが小さいうちに大人へのしかけが大切だ」

・廣末さん

「できるだけ多くの子どもたちに来てもらい、面白い活動をいっしょに取り組み、宣伝マンになってもらい、子どもたちを増やしたい」と次々にポイントを押さえた話が飛び出す。

○お父さんを巻き込むためには？

それぞれから

- ・ 「お父さんが入ってきやすいしかけが必要」、「力仕事には参加してくれるので、上手に誉める」、「飲み会も重要」、「とにかく、声かけ」、「PTAを離れたら掴まえるのは難しいので、そのときから目星を付けておく」といった意見が出て、会場は笑いの渦。

(コメント)

阿部 進さん

「それぞれ取り組みに違いがあっていい。学校から帰ってきたら、また学校だったということのないようにしてほしい」というまとめの言葉があった。

事務局より

地域には、子どもたちの健全育成に協力したい人たち、団体があり、声かけしたいで、積極的に活動に取り組んでくれるということを感じた。まずは、声を出して呼びかけて見ることが大切だ。そのときに、自分たちの取り組む方向性を明確に伝えることが大切であり、そこで理解してもらえれば、流れはできていくと思った。

高知大学のお兄さんお姉さんと楽しく遊ぼう

—子どもと一緒に楽しい遊びを—

日 時：2007年11月24日(土) 9:00~14:30

場 所：高知大学

参加者：約500人 子ども約300人 大人約200人(含大学生約100人 男約80人 女約120人)

高知でのガイダンスでは、高知市青少年教育委員会青少年課との共催で活動を行った。第一回目のガイダンスは高知市の小学校の子どもたちを集めて、高知大学の教育学部の学生による遊びを楽しんだ。

蒸しパン作り



万華鏡作り



教職をめざしている学生のみなさんですので、子どもと積極的に関わってくれた。いろいろな遊びや体験は、健全育成委員のみなさんと大学側とで話し合って、子どもの発達段階、興味・関心に合わせて今回の8つを決定しているとのことだった。子どもは事前に一つを希望して参加した。

バルーン・アート



水鉄砲作り



巨大シャボン玉



布わらじ作り



どの遊びや体験においても、子どもたちはいきいきと活動していた。布わらじ、割り箸鉄砲、水鉄砲では、大人も経験したことがあるようで、地域お大人の方も講師として頑張っていた。巨大シャボン玉ではシャボン玉の中に入ってみる体験もあり、子どもたちの喜ぶ声が鳴り響いていた。これらの体験のあと、食事をして、午後からは、全員で楽しいゲームをして1日を過ごした。

プラ版作り



割り箸鉄砲作り



事務局より

子どもたちは目を輝かせながら活動を楽しむことができ、充実感をもつことができた。このような経験の積み重ねが、自らやりたいという意欲の育成につながると考える。また、大学生にとっては、子どもに直接関わるきっかけとなり、子どもたちや地域の大人にとっては、多くの小学校が参加していたことで、地域の交流・関係異学年交流・学校間交流としても有効に働いていた。今後、ふれあうことの楽しさを知り、街で声を掛け合える関係へと広がっていければと考える。

自然と遊ぼう冬の植物園！

～子どもと一緒に楽しい遊びを～

日 時：2008年2月23日(土) 9:00～14:00

場 所：県立牧野植物園

参加者：132人 子ども73人 大人59人(男29人 女30人)

内 容：クイズ、押し花しおり作り、草花遊び、ネイチャーゲームを行いました。

クイズラリー(作戦タイム)



最初はビンゴ形式のクイズラリーである。各チームは学校ごとにいろんな学年の子が入るよう(たてわり)にして、異学年の交流も考えていた。また、大人も入るようにして、見守ってもらった。まずは、出発前の作戦タイムだ。

クイズの答を求めてグループで移動だ。上級生の子が巧みにリードして、クイズを解いていった。展示された内容が難しい時には、低学年の子にもわかるように説明をしてあげている場面もみられた。



(問題の一例)

- ・牧野富太郎が妻への感謝の気持ちを含めて、妻の名前を付けた植物は何でしょう？
- ・「さるすべり」の木を探して、名前の由来を確かめてみましょう。



草相撲



魚釣り



クイズの後は、草相撲、魚釣り、押し花をして遊んだ。草相撲は大人の方も懐かしそうで、大人も子どもも一緒になって楽しんでた。魚釣りは、傷を付けるとその部分が黒くなる“たらよう”の葉の特性を利用して、葉に魚の絵を描き、クリップをつけて、磁石で魚釣りをした。風が吹くと魚が跳ねて子どもたちも大喜びだった。押し花のしおり作りでは、オリジナルのしおりを作って楽しんでた。午後からはみんなで、ネイチャーゲームに挑戦した。冬の植物園だったが、ふきのとうを発見したり、木々のつぼみの膨らみを確認したりして、春の足音を感じることができた。

押し花しおり作り



ネイチャーゲーム



事務局より

学年、学校、を超えた交流が行えた。また、地域の健全育成に関わる方たちばかりでなく、多くの保護者も参加していただき、大人と子どもの交流も深めることができた。特に、たてわり班を使ったグループ編成にし、各班に見守り役として、大人がつくような形で行われ、高学年の子どもがリーダーシップを発揮して活動をしている姿が印象的であった。

東京フォーラム

「地域みんなで子どもを育てよう」 ～父親の参加もめざした子どもの健全育成～

日 時：2008年1月19日(土) 13:30～16:30

場 所：科学技術館サイエンスホール

参加者：134人 大人123人(男51人 女72人) 子ども11人

天気に恵まれた科学技術館サイエンスホールは参加者の熱気に包まれた。保護者、教育関係者、親父の会はじめ地域の活動者など、様々な人々が集まったフォーラムが行われた。知識教育重視で心も体も豊かな子どもが育つのか？ 子どもの健全育成に資する地域の役割、父親の役割とは？ 今求められている「人間力」とは、どのようにして育てるのか？ 当日発表された事例や親子の生の声なども紹介しながら、次代を担う子どもの健全育成について改めて問題提起したい。

1. パネリストの活動紹介

■板橋区立成増小学校 いきいき寺子屋

伊藤 朋弘さん(成増小学校学校開放協力会会長)

2002年4月1日からの学校週5日制の実施に伴い、土曜日の子どもの居場所づくりという観点から「いきいき寺子屋」の事業が発足した。現在、寺子屋に参加している児童は271名。保護者と58名のボランティア指導員の協力により活動している。活動内容は、書写、フラダンス、スポーツ、ユニホック、ベーゴマ、囲碁将棋、園芸、手芸、武術の9つのクラブである。

この活動を通して、子どもたちが自分たちで何かにぶつかったときに、それを乗り越える力が付くように手伝いができればよいのではないかと考えている。子どもたちに「あれをやりなさい」「これをやりなさい」と言うのではなく、子どもたちがしたいことを実現するために、大人たちができることは何かを考えて活動している。大人は、子どもたちに教えられることが多い。



■小平市立第八小学校 放課後子ども教室

井戸 雅子さん(八小子ども教室実行委員会コーディネーター)

2001年度、中休みを利用して、地域の人とふれあう「ハッチールーム」を開催した。土曜広場では、「土曜ひろば in 八小」を始めた。04年度から地域子ども教室。08年からは放課後子ども教室として、学童との連携を視野に活動している。

八小子ども教室は、安全管理員、運営スタッフ、先生、PTA、地域と多くの人に支えられてい

る。サッカー、野球、ソフトテニス、ゲートボール、よさこい、おもしろ工房、らくがき、絵手紙、書道、漢字、ハイキング、陶芸、茶道、ミニバスケット、パソコン、これらの16の安全で安心な居場所となっている。

12月現在で、212居場所(回数)5942名の子どもが参加、年々増加傾向にある。

子どもたちが安全で安心な居場所として、地域の大人・保護者と過ごせるのは、学校の理解と協力、スタッフの支えのお陰と感謝している。



■品川区立中延小学校 スマイルスクール

別城 宏さん(品川区教育委員会担当指導員 主任)

放課後や土曜日に児童と一緒にのびのびと過ごせる居場所として開校した。平日が放課後5時まで、土曜日が9時から5時まで。登録は130名。1日70名ほどが利用し、特別支援や障害を持っている子ども達が9~10名参加している。

「フリータイム」「勉強会」「教室」の三本柱。その中では高学年と低学年といった異学年との関わりが自然に起こり、子どもの自主性も育ってきている。

子どもにとってのびのびと遊べる場所、ほっとできる専用室、ほっとできる居場所、保護者に対してどうやって子育て支援を行っていくか、また、親同士の子育て支援をどのように行っていくか、子育てで孤立しないで、私たちと一緒に子育てをしていくという視点で放課後を見つめていくことが大切だと思っている。



■横浜市立川上小学校 はまっこふれあいスクール

田中靖子さん(NPO法人教育支援協会 地域教育担当)

放課後の学校の施設を利用して行っている放課後事業。現在、学童機能を兼ね合わせた、放課後キッズクラブという新しい事業が始まり、はまっこからキッズへと移行中である。

年間600~1,000万円の委託費が横浜市から出て、常勤1~2名、有償ボランティア2~4名の人件費等が含まれている。運営していく中で、自由に活動させること、安全に過ごさせることをどう両立させていくのか、自主性を引き出す方法、保護者の参加を増やす方法が課題になり、「駄菓子屋学校」のきっかけとなった。

駄菓子屋学校で、地域の人たちは、同じ時間、同じ空間を共有すること、体験して学ぶこと、人と人とは認め合うことが大事だと学んだ。子どもたちが、明日も楽しいことがいっぱい詰まっていると信じられるような、そんな社会になってくれたらいいと思いながら活動を続けている。



2. 参加した子どもや保護者の感想

活動紹介のあと、コーディネーターの堀田 力理事長(さわやか福祉財団)は、舞台を下りて、会場に出席している小平八小やはまっこふれあいスクールの子どもたちや保護者に、子どもたちが居場所に参加している感想をインタビューした。(――は堀田さんのことば)

(小1女子の母)初めはなんでも「お母さんやって」と言っていたのが、自分でいろいろ少しずつできるようになってきました。

――自分で考えてやるようになったのは大進歩ですね。



(小2男子の母)もともと作ったり、物を描いたりするのは好きなんですけども、それがさらに好きになって、自分でも考えてやるようになったと思います。やっぱり、好きなことなんですよ。好きなことをやって、そして、ますます好きになって成長していくって本当にうれしいですね。

(小2男子の母)前よりよく考えるようになりました。最初は決まったことしかできなかったのですが、自分で考えるようになりました。

――やっぱり、楽しみながら考えていくみたいですね。



(小5女子の母)勉強もかえて集中できるようになったと思います。楽しい時間を過ごしたあとで集中力が付いたようです。

――遊んでると、「勉強しなさい！」と親がよく言うけれども、思いっきり好きなことやらせると、勉強の方もかえて熱中するようになった！ それはいいですね。

(小5女子の母)日々の生活の中で、親から指示して、やらせることが多かったのですが、放課後クラブの活動に7つ参加させていただくようになって、自然と自分で持ち物や行く時間など自主的にコントロールできるようになりました。朝もちゃんとハイキングの時は4時～5時に起きますし、そういった自主性については見違えるようになりました。

(小5男子の母)1～2年生だった子どもたちが続けてやってくれることで、5～6年生になったときに、付いて行く側だった子どもたちが、自分より年の小さい子どもたちに「こうしよう」「ああしよう」「並ぼう」と声をかけてくれるようになりますね。それが、自分の子どももそうですが、そういうのが見えてととてもうれしいなと思います。

――それぞれ自分で考えてやることによって、あるいは、年齢の違う子どもとやることによ

って自主性も身に付く、考える力も身に付く、リーダーシップも身に付く、本当に子どもたちが成長している姿、お母さんも目でしっかりとらえておられます。

(小6男子) 将来は国際山岳ガイドといって、いろんな外国の山もガイドできる職業になりたい。そのために、英語とドイツ語とフランス語もがんばって勉強する。

—山登り好きなんだね。素敵な夢ができたね。がんばってください。



(小6男子の母) 兄の方は、勉強もあまり好きじゃないし、学校から帰ってくると家の中で意味不明の口癖を言ってばかりいるような子でした。けれども、ハイキングクラブに行くようになってからは、外に出るようになり、きつい山を登って、登り切った時の達成感という喜びを知って、何か壁を乗り越えようという力が付きました。あと、我が家のモットーとして「兄弟は競い合わずに助け合う」というのが家の教育方針なんですけど、山に行くと、競い合っている場合ではないので、助け合わないと命に関わりますし、協力し合わないといけないので、それが自然と身に付くようになりましたね。

—本当に素晴らしい成長ですね。

(小1女子の母) 何よりも子どもが「ただいま。今日楽しかった！」という一言で、親も喜べます。楽しんで帰ってきてくることほど安心なことはないですね。学校も楽しんで行っているようですが、それ以上に楽しいみたいです。

—学校も楽しいけどこれも楽しい？ 一番大切なことですよ。

(小6女子) 駄菓子屋や、漢字塾をやってます。駄菓子屋も塾もどちらも好き。駄菓子屋では、働きだしたら、ずっと働いて、遊ぶの忘れて働いてる。はまっこスクールに行くようになって、ほかの学年の小さい子とかに優しくしたり、遊んだりできるようになった。

(小6女子の母) 漢字塾では1年生から6年生までの漢字を終了してしまったので、ボランティアとして低学年に漢字を教える側に立たせていただいています。4月から中学生ですが、中学校に行ってもはまっこのボランティアに行きたいといっています。1年生のときから少しずつ経験を積んでこのように考えられるようになったのはとてもすごいことだと思います。

—ありがとうございます。遊びと勉強とは違うと考えている方もおられます。けれども、そうではなくて、遊びの中でどれぐらい自主性とか下の子に対するやさしさとか、協力するうれしさとか、楽しさとか、そういった生きていく基本、人間力を身に付けてくれてい

ることが、よくわかりいただけたと思います。本当に素晴らしい子どもたちでした。

3. パネルディスカッション

○運営する立場から見た子ども大人の成長

—運営する側として、子どもの成長ぶり、大人の成長ぶりはどうですか？

(伊藤さん) 子どもたちは、学年の上の人たちとの交流において、または、教えること、教えられることによる成長が見られます。お兄さん、お姉さんに教えられたことを卒業した後も下の子に指導しています。

大人は、子どもと同じ目線で見たり、聞いたり、感じたりすることができることはすごく大事だと考えています。子どもと大人という境はあっても、同じ人としての共にというところで気づかされ、成長するということは親になって、親の勉強をし始めるのと、同じだと思いますね。

(別城さん) 自分の子どもでない子を怒れるようになりました。自分の子どもばかり目がいてしまいがちですが、ほかの子も怒れるようになったと保護者から声が上がっています。その点では、いろんなことが勉強になりました。また、シルバー大学を出た、おじいちゃん、おばあちゃんたちも昔遊んだお手玉、囲碁、将棋とかを教えることによって、子どもから活気をもらえるようになって良かったと聞いています。

(井戸さん) 多くの方が教室に関わり、学校に足を運び、多くの大人たちが交流を図りコミュニケーションを図ることができるようになって、気軽に子どもにも声をかけられるようになってきました。それが、地域の見守りというものにもいい効果を生んでいるように思います。これが一番大きなことです。

○運営への心配り、心得

—こういうやり方をしないといけないよ、逆に、こういうやりかたやったらまずいよというような点で気づいておられることがありましたらお願いします。

(伊藤さん) 気を付けている点は大人が子どもを自分たちの思っているように動かそうとすることは極力避けるということです。どうしても自分たちのやりたいようにやらせることによって、自己満足しているようなところがあると思います。そういうところは大人同士が気を付けて相談しながら進めてやるようにしています。

(別城さん) 中延小学校では「自分が楽しくなければ、子どもも楽しくないだろう」という考えで、まず、最初の取り組みは子どもの3倍動くことにしています。自分がその遊びを覚え、子どもたちと一緒にやろう。できるようになったら、子どもたちは私たちより上手になっていくので、後は、自分たちでやっていきます。子どもたちのまた明日も来たいなという気持ちを大切にしたいなと思います。

(田中さん) 最初から最後まで、こうやって、こう仕上げるんだというビジョンがあまりにも強すぎる

と、その中で起こる予期しない出来事に対応できません。子どもは本来予期できない動きをするものであって、その子どもを自由に遊ばせる、自由に動かせることによって、見ている大人が何を感じるのか、どういうふうに思うのか、そういうところをできるだけ大事にしようと思っています。場所と時間だけを決めてあげる、それで、大きな事故が起こらないような配慮をしてあげれば、それができるような程良い加減がコーディネートに一番必要な力かなと最近では考えるようになりました。

○父親たちの参加について

(会場質問から) 地域との交わりに父親を引っ張り出すにはどのようにすればよいですか？

- ー これは大難問ですよ。日本の最後の壁と呼んでいます。私たちは今、親父を早く地域に戻そう、5時半には全員帰る、サービス残業はやめさせよ、という呼びかけを企業に直接やっています。なかなか、残業の壁、仕事の壁というのは厚いですね。地域で子どもを育てる活動が、本当に素晴らしい、魅力的な活動であることが、働いているお父さんたちにも伝わると、「オレも無理して頑張って帰ってでも、ちょっとやってみるか」という男性が増えるかもしれません。みんなで広めていければと思います。

4. まとめ 堀田 力理事長(さわやか福祉財団)

子どもは、「ゆとり教育」の大切さを主張してきました。「ゆとり教育」とは、教えないのではなく、「やる気を十分に培って、体で身に付ける本当の教育」を目指したもののなのです。

以前と比べて子どもに決定的な違いがあるのは、自分が好きでない子どもたちが増えてい



いうことです。本来、子どもというのは、生きていることが楽しくていろんなことをしたがる、生き生きしている、というのが特徴です。その力をうまく支えて、調整していくのが教育です。それなのに、自分はどうでもいい人間だと否定的にとらえてしまつては、いくら教えようとしても、いくら友達と交わらそうとしても、うまくいくはずがないのです。

一番大事なのはやっぱり生きていて楽しいという、そこがなければ何も出てこないのです。ですから、まず「楽しく学んでいこう」、これはすごく大事なんですね。ぜひ、地域みんなで子どもを育てていきましょう。

地域で時間をつくれる人、定年退職した人、また、働いているお父さん方にも参加していただきたいですね。さわやか福祉財団も最後の難関ということで、チームを組んで一生懸命取り組んでいます。なかなか壁は破れません。未来に夢を託して、子どもたちの、あの遊ぶ元気な姿を支えてあげてほしいと心から願っています。

やる気満々で、覚えることよりも考えることが楽しい、自分で考えて、「よしこうやろう！」「仲間と一緒にこうやろう！」というのが大事です。そういう子たちが我々の未来を支えてくれる。日本に生まれた仲間たち、子どもたちが生きてて良かったといつも感じながら生きていけるように、そのためにやれることはいっぱいあります。これから力を合わせて、少しでも世の中に広げていけるよう、みんなで一緒にやりましょう。

地域コーディネーター・実行委員・協力団体一覧

地域名	地域コーディネーター	実行委員・協力団体
盛岡市	久慈悦子	伊藤純 奥山健司 遠藤勝見 佐々木章一 谷藤康浩 北條浩之 三浦昌造 森田美彦 吉田学 盛岡市教育委員会 下永井自治公民館 月が丘小学校 月小おやじの会 繫小中学校おやじの会 いわて NPO センター
宇都宮市	矢野正弘	廣瀬隆人 細内千佳子 柳澤邦夫 吉澤由紀子 宇都宮市教育委員会 栃木県教育委員会 宇都宮市 P T A 連合会 宇都宮大学の皆さん 陽南地域コミュニティセンター運営委員会 宇都宮市青少年育成委員会 とちぎボランティアネットワーク
長野市	長野市 ボランティアセンター	青木尚久 井上和美 内山二郎 栗田真由美 小池康子 近藤積 志田和代 霜鳥和憲 原山ひとみ 春原るみ 福島貴和 藤沢薫 四柳美保子 鷺澤幸一 長野市社会福祉協議会 城山小学校 (含む PTA) 下氷飽小学校 (含む「飽会 (親の会)」)
和歌山市	中村富子	岡本晶彦 島久美子 三原一二三 村崎隆志 和歌山市教育委員会 わかやま NPO センター WAC わかやま 雑賀崎小学校・貴志南小学校 (含む PTA)
高知市	林 綾子	高知市教育委員会 高知市青少年育成協議会 高知市小中学校 P T A 連合会 高知市こども劇場
東京都	—	小平第八小学校 八小子ども教室実行委員会 品川区教育委員会 成 増小学校学校開放協力会 教育支援協会 川上小学校

※この他、フォーラムガイダンスにご協力ご参加いただきました児童、生徒、保護者、関係者の皆様に感謝申し上げます。

(さわやか福祉財団担当者) リーダー有馬正史・大坪直子・西田智男・吉田洋三

父親も参加した子どもの健全育成 フォーラム&ガイダンス 報告書

発行日 2008年3月

発行 財団法人さわやか福祉財団 子どもと交わろうプロジェクト
〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
TEL03(5470)7751 FAX03(5470)7755



「この事業は競艇の交付金による
日本財団の助成金を受けて実施しました」